

産業遺産の保存・利活用と生涯学習

北海道教育大学（札幌校）准教授 今 尚之

一人ひとりの歴史を示す産業遺産

2007（平成19）年、島根県太田市の「石見^{いわみ}銀山（石見銀山遺跡とその文化的景観）」がユネスコの世界遺産として登録されました。世界の多くの鉱山は森林資源を収奪し、環境破壊をもたらしたのですが、16世紀から大量の銀を生産し続けた石見銀山は、環境に配慮し、人と自然が共生しながら銀生産を実現させた、持続可能な開発という現代的なテーマを先取りする鉱山運営が行われたことなどから、産業分野としてわが国で初めての世界遺産となりました。宗教や政治の中心となった建造物のように、荘厳さや華やかさはないのですが、鉱山遺構や鉱山町の景観、土地利用の仕組みが人類にとっての普遍的な価値を伝えてくれる世界の財産（産業遺産）として評価された結果です。その後、わが国では、2014（平成26）年に「富岡製糸場（富岡製糸場と絹産業遺産群）」、2015（平成27）年には、岩手県から東海、中国、九州におよぶ「明治日本の産業革命遺産」が、世界遺産となりました。

人間生活に必要な商品・サービスを生産し提供する諸活動が産業です。人類の歴史の歩みを学び、人類や地球の未来を考えるために必要な、知恵や教訓、創意

工夫や技術、そして開発のあり方などを、私たちが学び、検討する財産として、世界的に保護（保存と活用）の対象として位置づけられているのです。

このような産業に関わる遺産の研究や保存に取り組む学問は、産業革命発祥の地であるイギリスを中心に、1960年代以降発展します。その研究者の集まりに、国際産業遺産保存委員会（略称:TICCIH^{ティッキ}）があり、ユネスコの世界遺産登録にも協力をしています。

TICCIHは、2003（平成15）年に、産業遺産の保存に関する国際的な基準（ニジニー・タギル憲章）を制定しました。それをもとに産業遺産の概念を整理すると、産業遺産とは「建物、機械、工房や工場、鉱山、倉庫や貯蔵庫、エネルギー施設、さらには輸送システムなど直接的に生産活動にかかわるもの」「公的なインフラストラクチャー、そこで働く人々の住宅、宗教や学校施設など、産業を支えた社会活動に使用された施設や場所」「図面、写真や映画、報告書などを含むさまざまな文献など」となります。

このように、産業遺産の幅は広いのですが、私たちの生活と密接しており、人類一人ひとりの生業、生活の足跡が対象となっていることが理解できると思います。

都市経済研究家・評論家の加藤康子氏は、産業遺産とは、「歴史をつくってきた産業文明の仕事、それに

かかわる人々の全人生」であると著作である『産業遺産―「地域と市民の歴史」への旅』のなかで述べ、さらに、産業遺産の保存や活用は、「働く人々、つまり大衆の歴史を理解するための生涯教育の一環として位置づけられる」とも述べています。

生涯学習と産業遺産

1965（昭和40）年、ユネスコのポール・ラングランは、パリで開催されたユネスコ成人教育推進国際委員会において、「永続的教育（生涯教育）」の概念を提唱しました。ラングランは「教育」を「成人になるための準備（社会に出るための学び）」ではなく、「人間の可能性を導き出す生涯を通じての活動」と唱えました。わが国では「生涯学習」という言葉が広く使われています。

生涯学習というと資格取得の勉強をしたり、余暇を使って趣味や教養を高めることをイメージしますが、それらは個々人一人ひとり可能性を引き出し、成長させていく取り組みです。また、地域が抱える課題解決に向けて、人々が、問題の生じている原因を調べ、確認し、解決策を皆で議論し、実行する学習活動は、地域が発展する可能性を引き出すことでもあり、地域づくりは、生涯学習の大切なテーマなのです。

私たちが生活する地域社会のなかで、名もない人々の人生や創意工夫、喜びや悲しみを知ることは、その地域で生活を重ね、未来に向かって歩んだ一人ひとりが、歴史の主人公であったことに気付くことになるでしょう。そのことは、地域づくりの基礎的な知識であり、教養といえます。

地域に残る産業遺産を学校教育で、あるいは図書館の資料、博物館の展示、公民館などの講座を通して学ぶこと、そして、具体的な建物や施設、図面や写真を前に語りあうことは、地域に生きる人を敬い、尊重し、人々の「きずな」を確認し、「未来」をともにするコミュ

ニティを強固にすることにもつながるでしょう。

しかし、すでに知られていることを学ぶことも大切なのですが、より大切な「学習活動」があります。それは、地域の産業遺産に光をあてることで、地域づくり、開発に活かしていくための学習活動です。生涯学習としてもっと盛んになるべきと考えています。

産業遺産に関心を持ち、調べたり、記録をつくる、あるいは保存、伝承などに取り組むことは、地域に埋もれていた資源を掘り起こし、地域の可能性を導き出すことにほかなりません。産業遺産を「知る」から「見いだす」「育てる」「価値づける」ことは、P.ドラッカーが唱えた「知識社会」における地域づくりであり、地域開発の取り組みの一つと言えるでしょう。

生涯学習と産業遺産の関係には、

- ①産業遺産を知る、学ぶ
- ②産業遺産を地域の財産にする
- ③産業遺産を伝える・活用する

の3つの学びの主題があるのです。

ほっかいどう学と産業遺産

言葉は悪いのですが「産業廃棄物」を「まちづくり資源（産業遺産）」に変えた事例は、各地に見られますが、1990年代に取り組まれた北海道上士幌町民の生涯学習活動は、廃止された鉄道橋りょうの保存にとどまらず、住民主体のまちづくりの先駆けともなり、町の知名度を向上させ、観光にも影響を与えました。

わが国の近代化150年間のなかで、北海道の産業開発に注ぎ込まれたエネルギーには大きなものがあります。その大きなエネルギーは、単に資本であったり、外来の技術やある特定の偉人によるものではなく、北海道の産業を支えた一人ひとりが、歴史の主人公となったことによるのではないのでしょうか。産業遺産を学ぶこと、活用することは、そのエネルギーを次の時代につなぐことと思っています。

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>